

国立国会図書館国際子ども図書館講演会
「多文化社会における児童書
・児童サービス」
第二部：多文化へのまなざし
－IBBY で私が出会った人々

2007年7月7日（土）
末盛 千枝子

IBBY 国際理事を務めて

こんにちは、末盛でございます。はじまる前に、マイクのテストをしておりましたら、パツティー・アルダナが、「あなたがその演壇の後ろに立ったら髪の毛しか見えないわよ」と言うので、ここから失礼いたします。どうぞよろしくお願いたします。私の話は、アトランダムに、いろいろな人たちの話や、IBBY で私が経験して皆様と分かち合いたいことを、お話させていただきたいと思ひます。IBBY の世界大会は2年に1度、世界各国で行われ、昨年は中国のマカオでありました。来年は、デンマークのコペンハーゲン、その後、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラ、その後、ロンドンと決まっております。この世界大会やIBBY の理事会を通して出会ったいろいろな人たちのことや、感慨深かったことについてお話させていただきたいと思ひます。

南アフリカ大会で ー子どもの本の持つカー

IBBY の理事の任期は2年で、ほとんどの人は任期を2回いたします。私は、南アフリカ大会の時に再選されました。そこでの挨拶をここでもう一度話させていただきたいと思ひます。南アフリカ大会へ行く直前に読んだ『100歳の美しい脳』（スノウドン著 藤井留美訳 DHC 2004）という本が、非常に興味深かったのです。アメリカのお医者さまがアルツハイマーについて調べた話です。わりと若いお医者さまだと思ひますが、アルツハイマーを調べるのに、アメリカ中にいるおばあさんのシスターたち（修道女）に、毎年、記憶力テストや心理テストなどをし、最後に「あなた方が亡くなった時には、

私に脳を下さい」と献体を頼んだそうです。最初、シスターたちは仰天したそうですが、彼女たちは結婚もしていないわけですから、自分たちが次の世代に残していくものは何もないので、脳をあげることにしましょうということになりました。「あなたは どうする」とお隣とつき合って、「あげてもいいけれど、私達は天国へ行ったら、脳のないまま走り回っているのかしら」などと、言ったそうです。なぜこの話をするかというと、そのお医者さまが、献体されたシスターたちの脳の解剖の所見を見て、明らかにアルツハイマーになっていてもおかしくないのに、そうならないシスターたちがいるのはなぜかを調べたのです。修道院という所は、修道会に入った時からの記録もあり、それぞれの人の成育歴もとってあるので、それぞれがどういう人かを調べることができます。そして、推測できたのは、アルツハイマーになってもおかしくない所見が解剖学的にありながらそうならなかった人たちは、ほとんどが子どもの時に本を読んでもらっていたことしか解らないということでした。私は、アルツハイマーについての本の中に、子どもの本と関連している箇所を見つけ、我が意を得たりと思ひました。というのは、子どもの本と関わって、その後その人たちが大人になり、いろいろな困難に出会った時に、子どもの時に読んだ本が力のないものだったら意味がない、子どもの時に読んだ本こそが、それぞれの人の生きていく力になっていくはずだと思ひておりましたので、この話を南アフリカでしました。何百人も入る大ホールで、それぞれの国の立候補者が話をするのを皆が見ております。たいていの人は真面目な図書館員なので、「私は、

子どもたちにこういう図書館活動をします」とか「こういう読書活動をしております」などと話をしていたところに、私が突然出て行って、アルツハイマーなどと言ったので、皆飛び上がったのですが、最後まで聞いてくれました。「なかなかいい話だったけれど、じゃああなたは、ここにいる私たちがアルツハイマーにならないと保証するわけね」と言われて困りましたが。それは冗談としても、本当に私自身は子どもの時に読んだ本や美しいものなどが、それぞれの人が生きていく時に、必ず何かしらの力になっていくのだと思っています。

IBBYの理事会が、こんなに忙しいものだとは思ってもせずに、島多代さんがIBBYの会長を退かれた後、日本から誰も理事に出なかったので、出てもいいかと手を挙げました。昔はそうではなかったと思いますが、今は電子メールがあるので、毎日世界中で理事会をやっているようなものです。理事会の議題については、必ず全員向けに“Dear all”というメールが来ます。自分が返事をする前に、誰かが自分と同じ意見で返事をしてくれていればそのままにしておきますが、これは言わなければいけないと思う時には、思いがけない声がバーンと地球のあちこちから上がり、非常におもしろい経験をいたしました。

理事として同じ時期ではありませんでしたが、レバノンのジュリンダ・アブナスールから聞いた話は、レバノンで空襲の中、パニックになっている子どもたちを、唯一落ち着かせて、安心させることができるのは、膝の上に子どもを抱いて本を読んであげることだけだったというものです。私はその時、「ああ、やっぱりそうなんだ」と改めて思いました。そういう人たちが、今でも各地で仕事をしているのです。

セビア大会で —ジェイ・ヒールの発言—

皆さんもよくご存知かもしれませんが、南アフリカのジェイ・ヒール（2000年および2002年国際アンデルセン賞審査委員長）は、たぶん彼の代からのイギリスからの移民です。南アフリカがまだIBBYに入って間もないセビア大

会でのことです。世界大会の時にはいつも、各国支部が自国の活動報告をするのですが、ジェイ・ヒールが、「私たちはやっと、我らのネルソン・マンデラ大統領と言うことができるようになりました」と言った時のことを、私は今でも忘れられません。背筋がゾクゾクとしたことを覚えています。私たち日本人から見たら、白人と黒人というそれだけのぶつかりとしか思っていなかったことが、やはりそんな単純なことではないとわかりました。南アフリカに実際に行った時には、皆が、ネルソン・マンデラという人をどんなに尊敬しているかもわかりました。同時に、何世代にもわたって南アフリカに住んでいる白人たちがいるということ、その人たちの大変さもあるということ、初めて実感いたしました。それは、やはり外から見ただけではわからないことだったと思います。

ボローニャでの理事会で —イラク戦争が始まって—

2004年のボローニャでの理事会は、ちょうどイラク戦争がはじまった時でした。毎年、IBBYではボローニャでアンデルセン賞受賞者の発表やIBBY朝日賞の発表が行われる記者会見があります。その時は、私とインドのニリマ・シンハ（インドIBBY会長/AWIC会長）とアメリカのジェフ・ギャレットの三人が記者会見の担当でした。ちょうど戦争がはじまった時に、決議文を出したり抗議したりするのではないけれど、子どもの本に関わっている我々がここで何も言わないということはないということで、まるで一緒に宿題をやるように三人で頭を寄せ合って、このことが子どもたちにとって重要なことで、私たちは皆が大変心配しているというコメントを出しました。その時に、イギリスの国際理事のアン・ラジムは、この人はいかにもロンドンの英語を話す人で、図書館員ですが、ぼそっと、「私の名前からもわかるように、私の夫はイラク人です」と言って、それから家族の話などいろいろな話をしてくれました。ご存知の方も多かもしれませんが、『バスラの図書館員—イラクで本当にあった話』（ウィンター絵・文 長

田弘訳 晶文社 2006) という私がとても気に入っている本があります。バスラで空爆の前に図書館の本を一所懸命に運んで疎開させる図書館員の話で、実際にあったことのようにです。日本語版を出版したのが私ではなくて残念だったと思うくらいに、素敵な本です。(スライドを見ながら) クルアーン (コーラン) の中で神が最初にムハンマドに言ったことは、「詠みなさい」ということでしたと書いてあります。(ページをめくって) こういうふうにして、本をどんどん疎開させています。レストランで働く人たち、近所の人たちとで、図書館の本を本棚から運び出しました、と書いてあります。この場面のように、自分の家に、どこもかしこも本ばかりです。床という床も、窓という窓も。このように本を全部運んで疎開させています。そういう絵本です。

アルダナさんの出した本

それから、IBBY 会長のカナダのパトリシア・アルダナさんの出版社 Groundwood Books が刊行した本を二冊ご紹介したいと思います。先ほども紹介していましたが、これがパトリシア・アルダナさんが出した *Ghost Train* (Paul Yee, Harvey Chan Groundwood Books 1996) という本です。カナダにはたくさんの中国人が労働に来て、その人たちによってカナダの鉄道が開かれた、そのことを語っているものです。作業の途中で、とてもたくさんの方が亡くなりました。なぜゴーストトレインかという、この少女のお父さんもカナダに働きに行き、自分たちは後に残されていたところ、カナダに来ないかと言われてやっと思行ののですが、その時にはもうお父さんが亡くなっています。どうしてこういうことになったのだろうと思、少女は汽車の中でずっと考えていると、鉄道に携わった中国人の幽霊に出会って、その人たちがどんなに一所懸命働いたのかを知っていくというすばらしい話です。

もう一冊は、日系のシェリー・タナカさんが書いた *One More Border* (William Kaplan, Shelley Tanaka, Stephen Taylor

Groundwood Books 2004) という本です。ナチスを逃れて、日本経由でカナダに逃れた人たちの話です。それからこれが、日本の杉原さんという領事 (杉原千畝 1900-1986) が、外務省の止めて帰国しなさいという指令にも関わらず、ビザを出し続けて大勢の人たちを日本経由で逃がしたという話です。ちゃんとカナダの本の中で語り継がれているというすばらしい例なので、是非ご紹介したいと思、持ってまいりました。ここに、杉原さんのご家族の写真も出ています。そういうわけで、IBBY を通して会った人たちという中にパトリシア・アルダナも入れました。

パレスティナが IBBY に加盟して

パレスティナのジハンも紹介したいと思います。非常に癖のある難しい人だとは思いますが。パレスティナが IBBY に入った時、いろいろなことがありました。入る前にも大騒ぎでした。南アフリカ大会の途中ででしたが、皆が乗ったバスの中で彼女は、「いつかパレスティナでも世界大会が開きたいのよね」と叫んだのです。一瞬バスに乗っている人たちは皆、凍りついたのです。すると彼女が「だって考えてごらんないよ、10年前に誰が南アフリカで世界大会を開けるなんて思ったの」と言いました。私は「そうだな」と思、忘れられない経験となりました。パレスティナで IBBY の世界大会が開けるようになった時は、本当に世界が平和になっている時だろうと思、います。

マカオ大会 —北京からの会場変更—

昨年のマカオの世界大会のことも少しお話させていたきたいと思います。もともと中国大会は北京で開くために4年間にわたって準備されてきました。そのたった4か月前の5月に、急に、中国から、北京では開けないと言ってきて、理事会は大騒ぎになりました。その時の会長のピーター・シュネックがすぐに北京に飛んで、北京の人たちと話をし、マカオでだったら今からでも準備して何とかできるということになり、もうマカオに決めたという報告をしました。それには、理事会が OK していないとか、

いろいろありましたが、どうしても仕方がないことだとわかって、マカオ大会になったのです。

2004年4月のポーニャのブックフェアでの理事会は、2年後の北京大会の準備で大変な時でした。その直前には、ローマ法王のヨハネ・パウロ二世が亡くなり、中国では反日運動がものすごく盛り上がっている時でした。テレビをつければ、ヨハネ・パウロ二世のお葬式か反日運動のニュースかという具合に、ヨーロッパでもその二つしかやっていない状況でした。私も日本の理事としては、これは困ったと思いました。中国の代表の人たちも泣きそうではありましたが。ポーニャのブックフェアが終わった理事会の後で、会長のピーター・シュネックが、北京大会準備の最後の打ち合わせのために6月に中国に行くことになり、その時期は、世界中が中国の反日運動のことを知っていたわけですから、ピーター・シュネックが私に「おまえ、一緒に中国に行く？」と聞いてくれまして、一瞬考えましたが、これは行った方がいいと思い、成田のボーディングゲートで待ち合わせをして、ウィーンから来たピーター・シュネックと一緒に北京へ行きました。

私たちは、天津であったブックフェアに案内され、そこで中国の出版文化大臣やその他の大変なお歴々にお会いしました。反日運動は、少しは沈静化していましたが、その直後でした。IBBY会長のピーター・シュネックの話の後で、私が大変緊張してご挨拶したわけです。たぶん反日運動では日本の教科書問題が大変大きかったと思います。個人と個人の間でも、もし人が誰かにもものすごく傷つけられた時には、傷つけた人が傷つけられた人に対して、後で、そんなこと何でもないことだと言ったりしたら、本当は傷が癒えていても、新たに傷が開くような、辛い思いををすると思うので、教科書問題や何かで中国の人たちに嫌な思いをさせて大変申し訳なく思います、と話しました。石という字を書いて、ミスター・シーという出版文化大臣は、大きな人でしたが、驚いたことに目に涙を浮かべて聞いてくださいました。基本的なことは、相手の立場を考えるとということ、それをすれ

ば通じるのだと思った記憶があります。ところが、結局その方は、そのことが問題ではないでしょうけれど、「私が全部の責任を持ちますからIBBYの北京大会は盛大に、立派にやりましょう」とあれだけ言ってくださったにもかかわらず、その後失脚してしまいました。その方が失脚したということと、北京で大会ができなかったこととが、どういう関係があったかはわかりませんが、結局マカオで大会を開かざるをえなかったのです。ただそのことは、私たち日本人にとっては、日本とマカオとの関係、天正少年使節、キリシタン殉教者たちの遺骨が、今もマカオのセントポールというファサードだけが残っている大きなカテドラルにあることなどを知る機会となりました。そういうことを経験する旅でもありました。そして、たった4か月で北京からマカオに場所を移して全てのスケジュールをやり直したCBBYの人たちと、その人たちと1日に何回も電話やメールでやりあったらうIBBYのバーゼル事務局長のリズ・ペイジたちの働きは、本当にすばらしかったと思います。そしてそれがちゃんと行われたことに感動しました。ただ、残念だったのは、肝心の中国からの参加者が極端に少なかったことです。それについては、以前から、現JBYYの会長である松居直さんは、中国の人たちはほんとうにどのくらい参加できるのでしょうかと、すごく心配していらしたので、やはりそういうことだったのかと思いました。

アン・ペロウスキーのこと

もう一人ご紹介したいのは、アメリカの理事であるアン・ペロウスキーです。今年4月、国際子ども図書館に彼女と一緒にうかがって、図書館員の人たちともお話をする機会がありました。大家族で育ったポーランド系のアメリカ人です。彼女自身は独身で、もう70歳すぎだと思えます。彼女は年に何度も頼まれて外国に行くほどのストーリーテラーです。そういうときに、その年に高校を卒業する甥や姪を、高校卒業祝いとして、必ず一人か二人、時には三人かもしれないませんが、一緒に連れていき、外国の経

験をさせるのだそうです。それは、皆で子どもを育てるといふことの、何か大きなサンプルのような気がします。聞くとところによると、最初にポーランドからアメリカへ移住した彼女のおじいさんたち、そこから育った家族が、何年かに一度集まるそうですが、800人くらいいるそうです。IBBYの世界大会どころじゃないです。ミネソタとウィスコンシンにまたがった辺りのウイノナの町に集まるそうです。

彼女の話の中で、私が「あの話もう一度して」と時々言うくらい好きな話があります。お父さんは農場をしていたのですが、子どもたちを育てるために、禁酒時代にお酒を造って警察に捕まってしまったそうです。刑務所に入るか、州の農場で働くかのどちらかを選ばなくてはならず、州の農場で働いたのですが、そこで習ってきたことは、牛にいい音楽を聴かせると、いい乳をたくさん出すということでした。刑期を終えて帰ってきた時には、自分の家にはレコードといったものはなかったので、代わりにたくさんいる娘たちが、毎晩牛の周りに並ばされて、お父さんの指揮で歌を歌わせられたそうです。また、彼女がニューヨークのパブリックライブラリーで調べ物をしている時、アーカイブズに、各国の民謡のセクションがあることに気がつき、自分が子どもの頃に、ものすごく大きなテープレコーダーを担いだ人が家に来て、お父さんとお母さんにポーランド民謡を歌ってもらって録音していたことを思い出して、探したそうです。すると、亡くなってもう何十年も経っている両親が歌うポーランド民謡を、図書館のアーカイブズで見つけることができたというとても素敵な話です。

先ほども、アルダナさんが「私たちは次の世代にいろいろなことを渡していかなければならない」と言っておりましたが、IBBYの友人の子どもたちも、世界のいろいろなところに飛んでいっているようです。ベトナムやカンボジア、それからパツィー自身の娘さんはガーナへ行ったということです。そして、奴隷たちが運び出された港なども見たようです。

国境を越えた養子縁組

コロンビアで世界大会があった時に、隣に座ったフィンランドの老婦人が「私の息子夫婦はコロンビアの子どもを養子にしているの」と話してくれました。本当にきれいな子どもだそうです。その子の部屋には、コロンビアの地図と旗を貼って、彼がコロンビアから来たということのを忘れないようにしているそうです。今回コロンビアに来る時にも、「私はおまえの生まれた国に行ってくるからね」と言ってきたということでした。私たち日本人にとっては、養子ということとはとても少ないですが、世界ではこういうふうに住んでいる人たちも多くいると思いました。

もう一人は、スペインのバスクのマリ・ホセです。彼女は、学者ですが、子どもがなくて、リトアニアから子どもをもらうことに決めたようですが、赤ちゃんと一緒にの幸せそうな写真が来ました。前回のマカオ大会を最後に、やろうと思えばもう一期できたのですが、赤ちゃんがいるからこれで降りると、次の人を紹介して理事を降りていきました。先ほどご紹介した『バスラの図書館員ーイラクで本当にあった話』の帯に、「本を愛する人は、希望を捨てません」と書いてあって、私はとても気に入っています。たかが帯と思いますが、いい帯だと思って、本の中に帯を挟んで入れています。

バスの中での大合唱

最後に是非お話したいのは、南アフリカのケープタウンの最終日のことです。体育館のような広いところで閉会式がありました。その食事会の後は、何台ものバスに分かれてそれぞれのホテルに帰るのですが、私が泊まったホテルは、監獄 (HOTEL JAIL) という名前のホテルでした。実際に政治犯のための監獄だったところを手直したホテルで、私が泊まった部屋は違いましたが、パツィーが泊まった部屋は独房でめったにないような経験をしました。そのホテルへの送迎バスの運転手さんがけっさくな人で、最終日の夜、私たちがバスに乗り込み出発した

とたんに、たぶん年配の方は知っていらっしゃるでしょうが“Now is the hour when we must say good-bye”という昔のポピュラーソングを口ずさみはじめたので、その歌の大合唱になりました。ロシアやベネズエラやベルギーなど、いろいろな国の人がいましたがみんなが歌いました。この歌だけで終わらず、次から次へと、ビートルズ、ナット・キング・コール、プラターズの歌など、年が知れますが、そういう歌を次から次へと歌い、オペラのアリアまで出てきて、最後には本当に大合唱になり、修学旅行のようでした。世界中から集まった子どもの本関係の人たちが、同じ時代の同じ歌を知っているということは、本当に不思議な経験でした。絵本もそうだと思いますが、歌をこんなふうに歌うことは、平和ってこういうことかもしれないと、世界中に散らばっているのに大切な思い出を共有しているという思いでした。そしてその時に思い出したことは、今日はお見えになっていませんが、福音館の唐さん（タンさん）という中国出身の編集者の方が、前にご自分の経験を『ビートルズを知らなかった紅衛兵』（唐亜明 著 岩波書店 1990）という本に書かれました。

そのタイトルを思い出して、ああいう歌を歌う経験ができないということがどんなに悲しいことだったかなと思いました。

私は、理事であることは、ハードワークで結構大変だったような気もしますけれど、これだけ多くの友だちを世界中に得られたことを本当にありがたい経験だと思っています。世界だけではなくて、日本のJBBYの会員でも、川端さんという80歳すぎの方は、結婚して1か月でご主人が戦争に行き帰っていらっしやなかった。その後はずっと小学校の先生をして働いて、今でも教え子たちに、ちゃんと先生は頑張っているとおっしゃっていただきました。そして、軍人恩給をまだいただいているから、IBBYの活動に使ってもらいたいと言って、時々ほんとにこっそりと寄付を下さいます。彼女もJBBYを通して私が出会った人と言えらと思います。

まとまりのない話ですが、全体を考えていただければ、「本を愛する人は希望を捨てません」ということが言えらと思います。どうもありがとうございました。